

平成20年度 教師海外研修研修（派遣国：ラオス）授業実践報告書

タイトル : 開発途上国で働くということ

氏名 : 吉原 久美子

学校名 : 下妻市立下妻中学校

実践教科 : 総合的な学習の時間, 学級活動

時間数 : 4時間

対象学年 : 1 : 第3学年 : 218名, 2 : 第3学年1組 : 36名,

3 : 全校生徒, 生徒の家族, 教職員

カリキュラム

■実践の目的

下妻中学校では、第3学年の進路指導目標を次のように定めている。

「自分の特色や希望する進路の情報を確かめ、さらに将来の生き方を考え、自分にふさわしい進路を選択するとともに、その進路において自己実現に努めていく生徒を育成する。」

1年生の時には、働くことへの関心を高め、実際に進路の希望や計画を持つようにする。2年生の時には、地域の事業所で職場体験学習をし、具体的な進路情報を得、そして将来の生き方を考える。3年生になってからは、主に高等学校についての情報を集め、自分にふさわしい生き方を考えていく。これが、中学生の進路学習の主な流れだ。

しかし、この流れに乗っているだけでは、得られる情報が少なすぎるのではないか。「井の中の蛙大海を知らず」になってしまうのではないか。下妻市は、商業と農業が主な産業である。職場体験先は、商店が主である。その他には、公共の事業所と保育園。これでは、将来の職業を考えるといても、多くの選択肢を持ってないだろう。ほとんどの生徒が、地元で就職することを考えている。それは、別にわるいことではない。しかし、大きな海があるのだということ、海とはこんなものだという情報を知らせてあげたいと考えていた。

そのような折に、教師海外研修の話があり、単なる観光ではなく、開発途上国について学ぶ機会を得た。この目で大海を見、大海のほんの隅っこでも泳いでみて、生徒達に「こんな世界で働くこともできるのだよ。」と教えてあげられるのではないか。海外で働く仕事、海外と協力し合って働く仕事というものに、関心を持たせるチャンスであると喜んだ。

ラオスに行ってみて、心に残ったことが3つある。一つ目は、家庭の温かさと学ぶことに対する熱意と喜び。二つ目は、JICAプロジェクトで働く人々の姿とその思い。三つめは、パワフルな子ども達の姿。

授業は、この3つの中から、JICAプロジェクトで働く人々を中心に作っていかうと考えた。途上国支援のために働く人たちの姿がどれほどまぶしいものであったか、私

の思いが伝わるいいなあと思った。

柱は、3本立てた。

一つ目は、ラオスとはどういう国であるのかを知ること。ラオスについて学ぶことが、開発途上国について学ぼうとする足がかりになればよいと思った。

第2に、ラオスの子ども達の生活を知ること。自分達との違いや共通点について考えさせたいと思った。

第3に、ラオスで働く人たちの姿を知ること。海外青年協力隊やシニア・ボランティアなどの人たちについての情報を得ることによって、海外で働くということは特別大変なことではないのだ、自分にもできるかもしれないと、考える生徒が現れることを期待して。

■授業の構成

1：総合的な学習の時間 対象：第3学年 218名 活動場所：体育館

次元・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
〈第1次〉（1時間） ラオスを知る ねらい：ラオスについての基礎的な情報を得る	(1) 社会科の学習をもとにしたクイズで、地理分野におけるラオスの位置を確認する。 (2) 写真を見ながら、ラオスの衣食住について知る。 (3) 感想を発表する。	・ 世界地図 ・ 東南アジアの地図 ・ クイズ ・ ラオスの写真 ・ PCとプロジェクター
〈第2次〉（2時間） 海外で働く仕事 ねらい：開発途上国を支援する仕事の例を知る	(1) JICAとはどんな組織なのか知る。 (2) 海外青年協力隊の活動について知る。 (3) シニア海外ボランティアの活動について知る。 (4) 技術支援専門家の仕事について知る。 (5) 感想を発表する。	・ パワーポイントで作成した資料 ・ プロジェクター ・ インタビューの録画クリップ

2：学級活動 対象：第3学年1組 36名 活動場所：3年1組教室

次元・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<p>〈第1次〉 ラオスの子ども達</p> <p>ねらい：ラオスの子ども達と自分達を比べ、自分の生活を振り返る。</p>	<p>(1) ラオス土産のポーチを見て、気が付いたことを発表する。</p> <p>(2) 写真を見ながら、ラオスの子ども達の生活について知る。</p> <p>(3) 感想を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ラオス土産のポーチ ラオスの子ども達を写した写真 プロジェクター

3：文化祭での展示発表 対象：全校生徒、生徒の家族、教師 展示場所：体育館

テーマ・ねらい	内容	使用教材
<p>1：ラオスとはどんな国？</p> <p>2：開発途上国を支援する人たち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ラオスの地理 ラオスの衣食住 海外青年協力隊の活動 シニア海外ボランティアの活動 技術支援専門家の仕事 	<ul style="list-style-type: none"> 写真

授業の詳細

【1：総合的な学習の時間 対象：第3学年 218名 活動場所：体育館】

〈第1次：ラオスを知る〉

授業の流れ

- (1) 社会科の学習をもとにしたクイズで、地理分野におけるラオスの位置を確認する。自分がラオスを訪れた経緯を説明した後で、次の7問のクイズ（資料①）を出した。クイズを出すときには、地図を見せたり、ヒントを出したりした。地図や質問内容は、プロジェクターを使ってスクリーンに映し出した。生徒には解答用紙を配布した。

- 問1：ラオスは、どの大陸にあるか。
- 問2：ラオスはユーラシア大陸のどこにあるか。
- 問3：ラオスは、この半島にあります。この半島の名前は、何と言うか。また、周りがあるA～Cの国の名前は何か。
- 問4：東京が正午の時ビエンチャンの時刻は？
- 問5：この川の名前は？
- 問6：ラオスの総人口は？
- 問7：ラオスの宗教は？

(2) 写真を見ながら、ラオスの衣食住について知る。

次の写真をプロジェクターで提示しながら、ラオスの概略について説明した。

- ① ラオスの民族衣装（・様々な民族衣装を着て踊るCCCの子ども達・レストランのショーで踊る女性ダンサー）
- ② ラオスの制服（制服を着たビエンチャンの小学生）
- ③ ラオスの普段着（街を行く人々）
また、自分が身に付けているスカートは、ラオスの女性が普段身に付けているシンというスカートであることを説明した。
- ④ ラオス料理（レストランで注文したラオス料理の数々）
- ⑤ ラオスの食材（モーニングマーケットで売られている食材の数々）
- ⑥ ラオスの農家の家
- ⑦ 首都の町並み
- ⑧ メコン川（川 滝 流域の商店 川を渡る小舟 渡し船の上で商売したり遊んだりしている人々）
- ⑨ ラオスの寺院
- ⑩ ラオスの僧侶
- ⑪ 飛行機の窓から見たラオスの国土
- ⑫ 山の上から見たルアンパバーンの街
- ⑬ ラオスを象徴する凱旋門

生徒の反応

ラオスという国名を聞いたことがない生徒がほとんどであった。だから、どの大陸にあるかと聞いてもさっぱりわからないようであった。アフリカ大陸とか答える生徒が多かった。アフリカ大陸の国の名前は、ほとんど知らないで、その中にあるのだと思ったようだ。

熱帯モンスーン気候と聞いても、ぴんと来ないようであった。熱帯というと、アフリカを想像してしまう。

アジアの熱帯地域というのが想像できないのである。ヒントに出した国々の名前は、よくテレビ等で聞くことの出来るものだが、それすらどこにあるかわからない生徒が多かった。自分達の身近にあるアジア諸国についての知識がほとんどないというのは、問題だと思う。

ラオスの人口が約600万人しかいないということに驚いていた。ほぼ全域が山地と高原地帯からなるので、人が生活したり耕作したりできる土地がわずかしかないことを確認した。日本も国土の70%が山林であるのに、この差はどうして生まれたのか疑問を持った生徒がいた。乾期には干ばつの、雨期には洪水の被害に受けやすいため、食糧を豊富に作れない。だから養える人口に限りがあること。また、長い間国内が内戦状態にあったことを補足した。

ラオスの写真を興味深げに見ていた生徒が多かった。特に、生徒の関心を強く惹いたのは、ラオスの食べ物についての写真であった。モーニングマーケットで売られて

いる蛙や鯰、蜂の子などの食材を見て、驚きの声をあげていた。

〈第2次：海外で働く仕事〉（資料②）

授業の流れ

- (1) JICAとはどんな組織なのか知る。

パワーポイントを使いながら、JICAについて簡単に説明した。



「JICAとJapan International Cooperation Agencyの略称で、日本語では、独立行政法人 国際協力機構ということ。日本が行う途上国支援・ODA（政府開発援助）のうち、「技術協力」と呼ばれる事業を実施するところです。日本の専門家を途上国に派遣したり、途上国の将来を担う人々を日本に招いて研修を行ったりしている。」という説明をした後、JICAのパンフレット「よりよい明日を、世界の人々と」を使って、主な活動を紹介した。

- (2) 海外青年協力隊の活動を知る。

まず、海外青年協力隊とはどういうものか簡単に説明した。

「途上国のために何かしたい、新しいことに挑戦したいという熱意を持った20～30代の市民ボランティアを海外に派遣している。いろいろな分野の中から、自分の得意なことや経験してきたことを生かせる職種を見つけて、参加することができる。年間約1300人（毎年春・秋に募集）採用され、その人達には、現地生活費、住居費、往復旅費、国内積立金等が支給される。」

次に、実際にラオスで活動している隊員について紹介した。教師の池田さんと芸術教員養成学校で活動する水谷さんについては、パワーポイントを使って紹介し、助産師の難波さんについては、ビデオクリップを見せて紹介した。



- (3) シニア海外ボランティアの活動を知る。

まず、シニア海外ボランティアとはどういうものか簡単に説明した。

「40～60代の人で、途上国のためになにかしたいという熱意のある人が、シニア海外ボランティアとして活動することが出来る。年間約500人（毎年春・秋に募集）が採用され、その人達には、現地生活費、住居費、往復旅費等が支給される。」

次に、現地の職業訓練学校で活動する、自動車整備士の田中さんを紹介した。

- (4) 技術協力専門家の活動を知る。

まず、技術協力専門家とはどういう人たちなのか簡単に説明した。

「専門分野で十分な実務経験を持ち、将来、専門家として活躍が期待される人材

を対象に、JICAが1年間の研修プログラムを組んで、研修をする。そして、途上国を貧困から救い出すために、専門家として派遣している」

次に、ラオスで専門家が入って行われている3つのプロジェクトと3人の専門家を紹介した。

一番目は、セタティラート病院で行われているセタプロジェクトと看護の専門家・清水さんについて。

二番目は、森林管理・住民支援プロジェクトと森林保護の専門家・宮崎さんについて

三番目は、南部3県におけるコミュニティ・イニシアティブによる初等教育改善プロジェクトと教育の専門家原品さんについて。

生徒の反応

ほぼ全員の生徒がODAについてもJICAについても知らなかった。ニュースでは、いろいろなNPOが開発途上国で活動していること、そしてゲリラの犠牲になっていることが取り上げられている。だから、

開発途上国に行くことは、危険なことである、無謀なことであるという認識があったという。

しかし、今回の授業を通して、プラス面での認識が持てるようになった生徒が多かった。そのプラス面とは、次のようなものである。

- ・海外青年協力隊員の人たちが、生き生きと活動していると思った。
- ・自分の仕事に誇りややりがいを感じているのがわかった。
- ・現地の人ととけ込んで、楽しそうに生活しているなあと感じた。
- ・貧しい国の自立のために、日本人が活躍しているのが、嬉しい。

何もかもが初めて得る情報だった生徒には、二時間の授業は、消化不良を起こしてしまうような内容だったと思う。しかし「初めの一步」であれば良いと私は思っている。なにごともしらなければ始まらない。JICAや海外青年協力隊があるということを知っていれば、いつか興味を持って動き出す生徒が出てくる。それは、どのような形でいつ表れるかわからない。しかし、種をまかなければ、いつになっても芽が出てくることはない。私は、種をまけたことを嬉しく思っている。

【2：学級活動 対象：第3学年1組 36名 活動場所：3年1組教室】

〈ラオスの子ども達〉

授業の流れ

この授業は、総合的な学習の第1次と第2次の間に行ったものである。

ラオス土産として生徒全員分のポーチを買ってきたので、それを取りかかりとして行った。

まず、ポーチを生徒達にあげるところから始めた。10色ほどのポーチがあったので、どれが良いか聞きながら配った。

そして、「このポーチは、いくらぐらいだと思うか。」という質問からはじめた。

このポーチは、大きめのペンケースぐらいの大きさを、ラオスの民族の生活が全面に刺繍が施されている。一つ一つ手で刺繍が施されているが、マーケットで見たところ、10歳ぐらいの幼い子供も接客のかたわら、ししゅうに励んでいた。自分で作ったポーチを自分で売っているように思えた。そのことを伝えて、「一つ作るのにどれくらい時間がかかるだろうか。」という問を続けた。この質問は、二つのことを考えさせるためである。一つは、かかる時間や労働の大変さのわりには、得られるお金はわずかだということ。もう一つは、10歳のときの自分は、何をしてすごしていたかということである。夏休みかも知れないが、生活を支えるために働いている子どもがいることを、目の前にあるポーチを通して実感してほしかった。

ポーチを使っのイントロダクションが終わった後は、プロジェクターで写真を見せながら、ラオスの子供たちに関する情報を伝えた。

一つ目は、学校の様子である。ビエンチャンの学校と南部の学校の写真を見せた。海外の支援が入っている学校は設備が整っているが、それはごく一部の学校で、ほとんどの学校は、何の設備もない学校である。掘っ立て小屋のような学校でどのように勉強するのか考えさせた。また、進学したくとも、様々な事情で中学校や高校に行けない生徒の多いことを伝え、勉強をすることのできない子ども達の将来についても考えさせた。

二つ目は、CCCで民族舞踊や器楽演奏の練習をする子供たちの様子である。部活動やクラブ活動というものがないので、年長者が年少者の世話をしながら伝統文化について教えていることを伝えた。地域が共同体として助け合って生活していること、愛情に満ちた温かい社会があることを感じ取らせたいと思った。自分達の地域のことでも振り返らせた。

生徒の反応

1. ポーチについて

300円ぐらいではないかという答が一番多かった。ミシンのかけかたが上手でないことや、全員分の土産物であることを考えての価格設定である。刺繍は一つ一つ手で施されたものだということを伝えると、自分のと他の人のとを比べて、刺繍の模様が違うことや、使われている糸の色が違うことなどに気づいた。刺繍をしたことがない生徒がほとんどだったので、しあげるのにどれくらいかかるか見当がつかない。「一日かかっても終わらない。」と答えた生徒もいた。「自分が作ったのでは売り物にならない。」という生徒も。10歳ぐらいの幼い子供が作っていることを知って驚いていた。「幼い子供が遊びもしないで、仕事をするなんてひどい。」「家族のために働いてえらい。」と賛否両論の意見が出た。しかし、多くの生徒は、2年生の時に国語の時間に学習した「小さな労働者」を思い浮かべ、他にも働く幼い子ども達がいるのではないかと、どんな仕事をさせられているのか心配していた。

2. ラオスの学校について

一枚の学校の写真を見せ、「これは何だと思うか？」と聞いたとき、学校で聞かれたのだから学校に違いないと考え答えた生徒が多かった。しかし、この村の学校は、この教室が一つだけで、ここに見えるのがすべてであると説明すると、余りにも自分達の知っている学校とは違うので、想像を膨らませることができず困惑していた。「トイレはどうするのか？」というのが、まず出てきた質問で、「外にするんだよ。」とか「家に帰ってするんだよ。」などと考えをまとめていた。「水を飲みたいときはどうするのか？」「昼ご飯はどうするのか？」など、学習について考える前に、生活の場としての学校のことをまず考えていたのは、9年間学校で生活する時間の長かった子どもの実感ならではだなあと感心した。

1年生の教室しかこの村にはない。しかも、この村に学校ができてから1年しか経っていない。学校ができるまでは、数キロ離れた隣村の小学校まで通わなければならない。その道は熱帯雨林に囲まれ、通学が困難である。毎年数人しか、中学校まで進学できなかった。などということの説明したが、実感できなかったようである。中には、「今の自分の生活より、その村での生活の方がいいなあ。勉強しなくてすむから。」と発言する生徒もいた。

教育の機会を得られないと、将来ごく限られた仕事にしか就けない、誰かに契約や金銭のことでだまされる危険が大きいのだと説明したが、日本には理解できないかも知れない。中学3年生といえば、すでに、読み書きを修得し、相当の知識を得、とりあえずは社会に出ても困らないだけの学習をしてきているのだから、小学校1年生程度の学力で社会にでなくてはならない人間の遭遇する困難を考えることはできないだろう。しかし、だからこそ、一人ひとりが人間らしい生き方をし、自分の手で未来を切り開くためには、知恵と能力を身に付ける「教育」が大切なのだ、繰り返し語りかけていくことが必要だと思う。

3. CCCの子ども達の活動について

年長者が年少者のめんどうを見たり指導をしたりするということについては、学校の部活動とよく似ているという感想をもったようである。また、地区によっては、お祭りの時に小学生から中学生までが一緒になって準備をするときのことを連想していた。しかし、ラオスでは地域ぐるみで、高校生ぐらいの年の子達から小学校低学年の子達までが一緒に伝統芸能を学んでいる、というのを知って驚いていた。自分の時間を削ってまで幼い子ども達の世話をすることに対しては、「どうしてそのようなことができるのだろう。」と不思議がっていた。

生徒達に食事に関してアンケートを採ると、一人で食事をする生徒が多いことに驚く。家族が全員そろって食事をするのはあまりないということだ。家族の間でも、これぐらいコミュニケーションは乏しいのだから、地域社会の人々の間でのコミュニケーションは望めないと思われる。年の違う子供との付き合いは、部活動が一緒にでなければ、まずないと言ってよいかもしれない。そんな希薄な人間関係をさっば

りして良いと考えている反面、多かれ少なかれ寂しさを感じているようだ。仲良くしていた友達とケンカをすると、それだけで学校に行きたくなくなってしまう、そんな子が多い。

そんな日本の現代っ子達に、ラオスから学んでほしいことは多くあると思う。家族が支え合って生きているということ。時間や場所を共有して、触れ合ったり話し合ったりしながら、仲良く生活していること。年長者が年少者を教えたり、力の強い者が弱い者を助けたりすることが、当たり前に行えるということ。

開発途上国といわれる国について考えるとき、貧しいから支援するという気持ちだけをもつのではなく、私たち先進国が開発と共に捨ててきたり失ってきたりしたものを教えてくれるありがたい存在であるという認識ももってほしいと思う。

【3：文化祭での展示発表 対象：全校生徒、生徒の家族、教職員 活動場所：体育館】

10月26日に下妻中学校文化祭「砂沼祭」が行われた。その際に、生徒と職員、見学に来た生徒の家族に見てもらおうと、ラオスを紹介する写真を展示した。

写真は、ラオスの衣食住や地理や文化について紹介するものと、JICAのプロジェクトで活動している人たちを紹介するものにした。写真一枚をA4サイズに引き延ばし、一目で何を写したものであるかわかるようにした。

写真の中で、最も参観者の目を惹いたのは、ラオス料理を写したものであった。機会があれば、簡単なラオス風料理を作り、生徒に味わわせたいと思う。



JICAの活動については、少ししか紹介できなかったもので、来年度以降は、パンフレットを取り寄せて手に取って読めるようにするとか、映像を紹介するとか、より情報量を多くしていきたいと思う。

成果と課題

今回の活動を通して、今まで生徒達が知らなかったラオスに目を向けることができた。一つ知っている国が増えれば、さらに他の国を知ろうと思うに違いない。ラオスを知れば、隣のタイやベトナムへの興味もわくだろう。アジアだけでなく、ヨーロッパやアフリカの国についての興味もわくだろう。

2学期の後半の総合的な学習の時間に、「らいふ」というテーマで各自のテーマを決め、調べ学習を行ってレポートを作った。その中に、数名ではあるが、外国に興味を持って、外国の文化についてまとめた者がいた。このレポートを下級生に紹介し、さらに海外に対する興味関心を高めるための種としたい。

進路を考えるための材料としての、JICAの紹介は、どれほど役に立ったかわからない。生徒が実際に仕事の種類を考えて動き出すのは、高校生になってからだと思うし、今のところ、将来海

外で働いてみたいと言っている生徒はいるが、海外青年協力隊員を考えている生徒はいない。しかし、「特別に高度な技術を身に付けなくても、開発途上国の支援をすることができる。」と私が述べたことを、いつか思い出してほしいと思う。

国際協力について学習すべき内容は多い。だから、できれば、総合的な学習の時間を使って、1年間計画的に学習を進めていきたい。そのために、国際協力に対する自分自身の研修を積んでいきたいと思う。

しかし、通年で学習ができなくても、学級活動や道徳の時間、総合的な学習の時間の年間計画の中に、国際協力についての学習内容を組み込み、ポイントを押さえた学習をしていきたいと思う。

また、今年度、私がラオスを通して学んだことや感じたことは、これから出会う生徒達にも機会をみつけて少しずつ伝えていきたいと思う。ラオス以外の国についても伝えられるよう、これからもできるだけ多く海外で見聞を深めたり、外国から日本に来ている人と交流していったりしたいと思う。

世界の人々のために、自分ができることを、小さいことでも行い続けられるよう努力していきたい。

【資料①：ラオスクイズ】

イントロダクション：「私は、8月3日から13日まで、ラオスという国に行って研修を受けてきました。研修の内容は、主に二つありました。一つは、ラオスの国ではどのように学校教育が行われているのか視察することです。もう一つは、JICAという団体が、ラオスでどのような活動をしているのか視察することです。これから皆さんに、ラオスで私が学んできたことをお伝えしたいと思います。

お伝えする前に、ラオスはどこにあるのか知ってもらうために、地理クイズを使って学習していきたいと思います。」

問1：ラオスは、どの大陸にあるでしょう。次の5つから選びなさい。（世界地図を見せて）

- ア ユーラシア大陸 イ アフリカ大陸 ウ 南アメリカ大陸
エ 北アメリカ大陸 オ オセアニア大陸

ヒントです。ラオスの人の主食は、お米で、野菜や川魚や鶏肉などをおかずにして食べています。

問2：ラオスはユーラシア大陸のどこにあるでしょうか。次の5つから選びなさい。（ユーラシア大陸の地図を見せて）

- ア フランスやドイツのあるヨーロッパ
イ サウジアラビアやイランのある西アジア
ウ インドやパキスタンのある南アジア
エ タイやインドネシアのある東南アジア
オ 中国や韓国のある東アジア

ヒントです。ラオスは、熱帯モンスーン気候に属しています。高温多湿で、雨期と乾期がはっきりしています。首都の平均気温は、雨期は28度、乾期は22度です。

問3：ラオスは、この半島にあります。この半島の名前は、何と云うでしょう。また、周りにあるA～Cの国の名前は何でしょう。

（インドネシア大陸の地図を見せて）

Aの国についてのヒント：仏教国で、国王が国を治めています。チャオプラヤ側流域で稲作を行っています。機械類と米を輸出しています。首都はバンコクです。

Bの国についてのヒント：1964年、アメリカ合衆国がこの国の内線に介入し、1973年までこの戦争は続いていました。その後1976年に南北が統一されました。工業化を進められています。首都はハノイです。

Cの国についてのヒント：1970年代に王政が廃止されてから、長い間内戦状態にありました。

私たちが食べているカボチャの語源は、この国の国名

にあると言われてています。首都はプノンペンです。

問4: ラオスの首都は、ビエンチャンです。ラオスは統計105度を基準に標準自国を定めています。

東京が正午の時ビエンチャンの時刻は？

問5: この川は、東南アジアで最も長い川です。中国、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの6カ国を流れています。全長約4000キロメートルです。この川の名前を何と言うでしょう。次のア～オから選びなさい。

ア: チュー川 イ: ナイル川 ウ: ライン川 エ: メコン川
オ: ミシシッピ川

問6: ラオスの国土の面積は、24万平方キロメートル、日本の約3分の2です。では、総人口は、どれくらいでしょうか。次のア～オから選びなさい。

ア: 約1億6000万人 イ: 約8,000万人 ウ: 約5,000万人
エ: 約1,200万人 オ: 約600万人

なぜ、こんなに人口が少ないのか、地図を見て、理由を考えてみましょう。

(ラオスの地図を見せて)

問7: ラオス人の宗教は何でしょう。次のア～エから選びなさい。

ア: キリスト教 イ: イスラム教 ウ: ヒンズー教 エ: 仏教

【解答用紙】

問題番号	解 答	メ モ
問1		
問2		
問3	○ 半島の名前： ○ A国： ○ B国： ○ C国：	
問4		
問5		
問6		
問7	○人口： ○理由：	

【資料②：海外で働く仕事のパワーポイント資料（一部抜粋）】

海外青年協力隊

途上国のために何かしたい、新しいことに挑戦したいという熱意を持った20～30代の市民ボランティアを海外に派遣しています。

いろいろな分野の中から、自分の得意なことや経験してきたことを生かせる職種を見つけて、参加することができます。

年間約1300人（毎年春・秋に募集）

現地生活費、住居費、往復旅費、国内積立金等が支給されます。

JICA

名称：独立行政法人 国際協力機構

略称：JICA（ジャイカ・Japan International Cooperation Agency）

JICAは、日本が行う途上国支援・ODA（政府開発援助）のうち、「技術協力」と呼ばれる事業を実施するところです。日本の専門家を途上国に派遣したり、途上国の将来を担う人々を日本に招いて研修を行ったりしています。

青年海外協力隊の難波さん（助産師）

難波さんは、日本の看護大学で看護師さんと助産師さんの資格を得ました。数年日本で働いた後、青年海外協力隊に応募しました。現在ラオスのセタティラート病院で産婦人科の看護師さんに日本の技術を指導するボランティアを行っています。

芸術教員養成学校で指導する水谷さん

水谷さんは、美術大学で版画などを学んできた方です。一昨年海外青年協力隊に応募しました。現在、ラオスの芸術教員養成学校で、美術の先生を目指している学生さん達に、テッサンの方法などを指導しています。



シニア海外ボランティア

40～60代の方で、途上国のためになにかしたいという熱意のある人が、シニア海外ボランティアとして活動することが出来ます。

年間約500人（毎年春・秋に募集）

現地生活費、住居費、往復旅費等が支給されます。

職業訓練学校で指導する田中さん

田中さんは、日本では自動車の整備士として、会社で働いていました。

若い頃も、海外青年協力隊員として、ケニアでボランティアをしたことがあります。退職後、シニア海外ボランティアに応募しました。4年前からラオスの職業訓練学校で、自動車の整備の仕方を教えています。

